

ランボー 最後の戦場

2008(平成20)年3月25日鑑賞〈試写会・リサイタルホール〉

★★★



監督・脚本・出演＝シルベスター・スタローン／出演＝〈5人の傭兵〉マシュー・マースデン／グレアム・マクタビッシュ／レイ・ガイエゴス／ティム・カン／ジェイク・ラ・ボッツ／〈キリスト教支援団〉ジュリー・ベントツ／ポール・シュルツ／ケン・ハワード（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2008年アメリカ映画／90分）

第2章

面白くて勉強になる

……『ロッキー』シリーズに続き『ランボー』シリーズも、シルベスター・スタローンが62歳となった今遂にファイナルへ！ 最終章のテーマは人間を描くこと。その舞台はミャンマー。軍事政権が暴虐の限りを尽くすカレン族をめぐって、ランボー、キリスト教支援団そして5人の傭兵たちはいかなる活躍を……？ そして、コトが終わった後、ランボーは……？

ランボーは今、どこで何を……？

『ロッキー』シリーズが第6作の『ロッキー・ザ・ファイナル』（06年）でファイナルとなったように、『ランボー』シリーズも第4作の『ランボー 最後の戦場』で幕を下ろすらしい。『ロッキー』がアメリカンドリーム of 光の部分なら、『ランボー』はその正反対で、絶望と怒りの象徴。

考えてみれば、自由と民主主義の守り手を自負するアメリカは、朝鮮戦争はもとより、ベトナム戦争、アフガン戦争、イラク戦争等々を戦ってきたが、そんな戦争の場にしか自分の存在価値を確認できない悲しきヒーローがジョン・ランボー（シルベスター・スタローン）。祖国アメリカに絶望した彼は、今タイ北部のジャングルに覆われた山の中で孤独な日々を送っていたが……。

チベットでは？ ルワンダでは？

2008年3月14日に起きたチベット自治区ラサで発生した僧侶や市民による共産党・政府に対する暴動事件は、北京オリンピックへのボイコットを含む政治問題に発展す

る可能性を含んできた。他方、『ホテル・ルワンダ』（04年）によってがぜん有名になったのが「ルワンダ虐殺事件」。フツ族によるツチ族の大量虐殺（ジェノサイド）を生々しく描いた映画『ルワンダの涙』（06年）によって、その惨状はさらに明確に（『シネマルーム14』101頁参照）。

最終章の舞台は、軍事政権下のミャンマー

世界情勢の動きと共に歩んできたシルベスター・スタローンが、『ランボー』シリーズ最終章の舞台として選んだのはミャンマー。とりわけミャンマーの軍事政権によるキリスト教徒が多いカレン族に対する大虐殺。これは、反キリスト教という主義主張以上に、原油はもちろんルビー、エメラルド、ヒスイ等を産出する彼らの土地を略奪することが目的だが、その極悪非道ぶりは何ともすごい。ちなみに、この映画は『ランボー』シリーズ初のR-15指定とされたが、それは主演の他、監督・脚本を兼ねるシルベスター・スタローンができる限り正確にミャンマー軍事政権の行っている暴虐ぶりを観客に示そうとしたためだ。

国連の平和維持活動への参加にすら拒絶反応を示すノー天気なわがニッポン国の国民こそ、この映画からこういう現実をしっかりと見すえる必要がある、と私は思うのだが……？

最終章で目指したものは？

『ランボー』最終章を監督するにあたって、シルベスター・スタローンが目指したのは人間を描くこと。ランボーには戦争や戦闘がつきものだが、ランボーは今、ミャンマーの惨状について、木枯し紋次郎のセリフのように「あっしには関わりねえことござんす」と距離をおき、1人世捨て人のような生活を送っていた。

そこに飛び込んできたのが、医師マイケル・バーネット（ポール・シュルツ）とその婚約者の女性サラ・ミラー（ジュリー・ベンツ）を中心とし、宣教師数人を含むコロラド州のキリスト教支援団ご一行様。彼らはカレン族に医療品を届けると共にキリスト教をより広めようとしていたのだった。純粋に「人を救うことに価値がある」と信じ込み、ひたすら前向きに進もうとするサラの瞳に負けた（？）ランボーが、この一行のミャンマー入りに協力することになったところから、最終章の物語が始まることになる。そして、以降ランボーの人物像や生き方に対比されるのは、第1にこのキ



© 2007 EQUITY PICTURES MEDIENFONDS GMBH & CO. KG IV

のものを描くことに大成功。さすが、監督・脚本家としても円熟の域に達しているシルベスター・スタローンだと感心。

🎬 こんなキレイ事では……？

ランボーはサラの価値観と生きザマには理解を示したが、原理原則論ばかりのバーネットには拒絶反応。だって、川を上る船が海賊に襲われても、その海賊をやっつけてしまうと、「どんな場合でも、人を殺すことは許されない」ときたから、そりゃたまらない……？

しかし、ランボーたちに救出された後、政府軍との壮絶な撃ち合いとなったとき、バーネットはムザムザと殺されるのを待つだけ……？ それとも、目の前で銃を突きつける敵に対しては反撃するの……？

キリスト教支援団ご一行様の価値観は理解できるものの、そんなキレイ事では……？ そんなランボーの価値観に私も同感。

🎬 個性豊かな5人の傭兵たち

シルベスター・スタローンは、最終章にふさわしく、5人の傭兵についても個性豊かな男たちをそろえた。すなわち、①長年の戦いを経ても純粹さを失わない狙撃の名手スクールボーイ（マシュー・マースデン）、②SAS（イギリス陸軍特殊空挺部隊）出身の金だけのために動く非情な戦士ルイス（グレアム・マクタビッシュ）、③湾岸

リスト教支援団ご一行様のそれ。そして第2に、拉致されてしまったバーネットやサラたちの救出のために雇われた5人の傭兵たちのそれだ。

この映画は90分の中に迫力あるアクションシーンだけではなく、見事にこの三者の人間像と生きザマを対比させ、人間そ

戦争に裏切られたかつての理想主義者ディアス（レイ・ガイエゴス）、④いかなるときも冷静沈着な元韓国軍兵士エン・ジョー（ティム・カン）、⑤恐怖さえ麻痺した戦争屋リース（ジェイク・ラ・ボッツ）だ。

中盤からのストーリー展開の中、そんなキャラに沿った彼らの奮闘ぶりがたっぷりみられるので、それに注目！

この、名セリフは永遠に！

5人の傭兵たちはプロだけに、自分たちの仕事の危険性はよくわかっている。したがって、人質たちを守る政府軍が100人以上いると聞き、「そりゃヤバイ」「もらっている金ではペイしない」と考えたのはむしろ当然。

そこでランボーが、5人のリーダー格となっていたルイスに対して突きつけたのが、「ムダに生きるか、何かのために死ぬか？ お前が決める」という名セリフ。この問いかけに応じたのがディアスやスクールボーイたちで、結局5人の傭兵たちはランボーの指揮下で危険極まりない人質奪還作戦にチャレンジすることに。この名セリフはこんな極限状態の中ではすごい重みをもつが、実はこれは実生活においても常に問いかけなければならないもの。この、名セリフは永遠に！

最終章のラストシーンは、ちょっと意外……？

人質たち救出のスリル、成功した後に受ける政府軍からの追跡、それに対する「世界最強の一人軍隊（ワンマン・アーミー）」と呼ばれた男ランボーの反撃と、映画は予想どおり（以上）の攻防戦の迫力を見せていく。そしてランボーは無事政府軍を撃退することに大成功……。そんなストーリー展開は読んでいるはずだが、それでも面白いのが『ランボー』シリーズだ。

私がちょっと意外だったのは、ラストシーン。映画前半にランボーとサラとの会話の中で「あなたの出身は？」「家族は？」等のやりとりがあったが、この映画のラストシーンはそんな会話に沿ったもの。しかし、『ランボー』シリーズ最終章のラストとして、そんなシーンがふさわしいかどうかについては、さて……？

2008(平成20)年3月26日記